

## 食肉処理施設の視察と実践的な農場管理手法を学ぶ —— FMVA が現場実習を行う

農場管理獣医師協会 (FMVA) は、3月5～7日の3日間にわたり埼玉県下で管理獣医師の業務を体験する現場実習を実施した。健康で安全な畜産物の生産や生産性の向上など、さまざまな場面で活躍が期待されている管理獣医師を育成するため、獣医療提供体制整備推進協議会 (事務局：日本獣医師会内) が実施する管理獣医師等育成支援事業として行ったもので、家畜保健衛生所、地方自治体、食肉センターなどに勤務する獣医師が受講した。

食肉の生産現場から食卓までの食の安全・安心の取り組みを改めて理解してもらうとともに、農家を指導するに当たって必要な生産活動の基礎、リスクマネジメント、HACCPの基本を踏まえたFMVAが実践している農場管理手法などについて講義・実習がびっしりと詰め込まれたプログラムだ。

初日は座学で、「食の安心・安全を担う獣医師の役割」(講師：北村直人・FMVA会長)、「獣医師による食肉の第三者認証システム」(飯田潔・同事務局長)について受講。

2日目は、実際に食肉処理施設 (和光食肉センター) と食肉検査所を視察したあと、施設運営者から「食肉センター、検査所、カット工場の衛生管理」(吉田安夫・㈱アグリシステムセンター長、仁科英子品質管理担当)、続いて流通業者から「食肉流通における衛生管理」(植村光一郎・㈱ミートコンパニオン常務執行役員)、行政から「埼玉県優良生産管理農場認証」(齊藤任亮・埼玉県畜産安全課家畜衛生担当主幹)についての講義を受けた。

最終日は再び座学で、「バルク乳モニタリングに基づく乳房炎コントロール」(三好志明・エムズ・デーリィ・ラボ代表、写真)、「肥育農場における牛群管理」(大橋邦啓・



「バルク乳モニタリングに基づく乳房炎コントロール」をテーマに講義した三好獣医師

FMVA事務局次長)のあと、パソコンを使ってFMVA方式農場管理手法を学んだ。

このうち、三好氏は乳房炎感染成立の要素として原因菌の存在、牛の状態、環境条件の3つをあげ、それが重なり合った時に乳房炎が発生するとした。その上で、バルクタンク乳 (バルク乳)、臨床型乳房炎乳、初乳の定期的なモニタリングによって乳房炎をコントロールできることを強調した。

3つのモニタリングのうち、特にバルク乳のモニタリングが重要で、バルク乳分析は①乳質や乳房炎の問題がある牛群を調査するための論理的なアプローチになる、②牛群の全ての分房をサンプリングするよりも経費がかからない、③牛群の乳質および乳房炎状況を調査する信頼度の高いツールである、④牛群の総合的な健康マネジメントサービスの重要な構成要素である、⑤農場での乳質評価プロトコルの証明になる、などの利点をあげた。

耐熱菌、生菌数、黄色ブドウ球菌数、無乳レンサ球菌数、環境性ブドウ球菌総数、大腸菌群数等を検査するわけだが、例えば生菌数が多ければ搾乳衛生に問題がある。大腸菌群は乳頭の清拭が不十分な場合に増加するが、牛床の衛生にも問題がありそうと考える。

三好氏は「乳房炎の損失は大きい。バルク乳のモニタリングによって乳房炎を早く見つけて、廃棄乳をできるだけ少なくすることが農家が利益を出すポイントだ」と締めくくった。